



京都の民主運動史を語る会 会報 題字 住谷悦治

代 表 岩 井 忠 熊

会費・会報代とも年3,000円

〔郵便振替払込〕

口座番号 01060-7=15762

加入者名 燎 原 社



奈良街道

画 蓮佛 亨

編集後記

レイテ島の記録（一）

伊藤 和市

五辻英一郎小伝

馬原 郁

五辻英一郎小伝

馬原 郁

戦時中、日本国民は「進め一億火の玉だ」というスローガンのもと、すべての人々が戦争遂行のため動員されました。学校教育はもとより、女性も老人も「国防婦人会」「愛国婦人会」「在郷軍人会」などに組織され、竹槍訓練や防火訓練に明け暮れ、日本国民の大多数が「日本は神風によって必ず勝利する」と信じていました。神風が何かを考えることなく、国民は全く理性を失っていました。侵略戦争に反対し、抵抗をして弾圧されたり、弾圧されないまでも戦争を冷やかに見て、嵐の過ぎるのを待った人々が存在したことを人々が知ったのは戦後になってからでした。戦時中の思想統制ぶりを知るものにとって、それはまさに驚きでした。五辻英一郎さんも嵐が過ぎるのを待った一人です。では五辻さんがどのような環境に生まれ育ち、また成長の過程でどんな人に出会って理性をたもちえたのか、九一歳の高齢で今なお日中友

好協会や年金者組合その他の会合などに出席して人々を励ましていた五辻さんに話を聞きました。五辻さんは小学校の先生の影響だといわれますが、私はお母さんについても興味をもちました。以下、五辻さんの話の概要を記述します。

聞き手 馬原 郁

私が最も影響を受けたのは高等小学校のときの先生です。藤原薫という師範学校を卒業して二年目の若い先生でした。大正デモクラシーのなかで新興教育運動の影響を受けていました。修身の時間は教育勅語の解説ばかりでしたが先生は「教科書を買う必要もなかったのに無駄な金を使わせて」と言いながら「修身は採点できるものではない」といって、それほど修身教育に熱心ではありませんでした。そしてなぜ、戦争が起るのかなどの話をしています。た。「首になったら会社にも勤めるわ」と大変おおらかで、授業

内容ではよく作文を書きました。天気がいいときは岸和田城の天守閣あとに上り、小松林の遠くに大阪湾を見てよく話しました。

当時の師範学校は、軍国主義を徹底し政府に従順な国民をつくるために、日本の教育を担う教員をまるごと管理しました。学生は全寮制で、学費及び生活費もすべて無料でしたから、家が貧しい子弟も数多く集まったようです。師範学校を卒業して兵役につくと希望者は軍曹(軍隊の階級の一つ)になれました。あの頃の師範出の先生は力も強かったです。

岸和田は紡績の町です。大勢の女工がいました。工場の寄宿舎に行ったことがあります。広い部屋でたくさん女工が暮らし、労働は一二時間、朝と夕方の六時が交代で、寄宿舎から工場への出勤には暴力団がついて通っていました。工場同士の引き抜きや脱走を防ぐためでした。引き抜きに応じたことがわかったとひどいリンチを受けたそうです。一二時間の労働をして工場から帰ってくる娘たちは、顔が浮腫み、髷に綿ばかりをたくさんつけて疲れ切っていました。女工のトイレに、「赤ん坊の死体が浮いていた」「五年の年期をつけて売り飛ばされた」など悲惨な噂話はよく聞きました。私の母

親が家でお針を教えていた器量良しの女の子が、ある日突然いなくなったので母に聞くと「売られたんや」といったこともありましたが、藤原先生は「ひと握りの資本家がもうけて株も一〇%の配当をしている。娘たちはかわいそうやな」と話していました。「娘は大事にせなあかん」という内容のビラがまかれたのを覚えています。天王寺師範学校が大弾圧を受けましたが、藤原先生がどうだったかはわかりません。藤原先生のところへは卒業してからも年に一回くらいは訪れました。そして恋愛や仕事のことなどの人生相談もしました。私が府会議員になってからも多忙の合間を見て岸和田へ帰ると、当時の同級生を一〇人くらい集めて待っていてくれました。その先生は九四歳で亡くなりました。

母親は堺市の生まれ、母の父は「ホシカ」という魚肥の仕事をしていました。いわしやにしんの不良品を九州などから買い集めて泉州の農家に売り、農家から菜種や綿の油を絞った白絞油、河内平野でとれる木綿等を荷負いや牛車で運搬して大阪へ卸していました。しかし、満州から油粕が輸入され、石油も輸入、商売もしくしく

なりました。資本主義発達の被害を真っ先に受けたといえましよう。若いときに長崎で暮らしたこともあり、新しい知識もあって反骨的な祖父でした。堺では三、四歳年上の与謝野晶子と同じ町内（甲斐の町）でした。商売がたちいなくなつたので船会社へ勤めはじめ、神戸通いが始まつたときに堺の家を畳んで大阪の道頓堀へ移住しました。道頓堀では教会へ行っていました。「ヤソの話は聞いた方がええ」と私も一銭貰っていました。その島内教会は現存しています。戦時中、私が警察から睨まれた時にも「お前の考えは判るけど、危ないことはやめとけ」という程度のものでした。父の影響で話は理解してくれました。

父は滋賀県米原で代々酒屋の三男に生まれましたが、明治一五年ごろ続けて三年間、酒が腐るという災難に会い家は没落しました。小学校二年の夏休みに退学して村の同志社大学生に連れられて京都に出ました。京都在住の叔父の養子になり、三条西堀川の左官に丁稚に入りました。その左官屋は三井系列の仕事が多く、ソウルや東京への出働きや和歌山の鯨屋敷、お茶屋の座敷など割のよい仕事を

していました。左官としてのプライドが高く「お店（おたな）の仕事しかしない」というのが信念でした。その後に大阪に出て、母方の祖母（父の姑）のへそくりで車や道具を買って独立しました。しかし、そのおばあさんは「賃稼ぎは収入がしれてる。商売がよい」と小学校六年を卒業した私を大阪船場の繊維問屋に丁稚奉公させたのです。私の身体が弱かつたせいもありました。私はその後、京都に出ましたが、私のことで父は岸和田の特高警察に呼び出されたことがあります。「息子は京都でアカになって刑務所入りだ。アカは非国民で人間のくず、ヤクザより劣る」と言い、戦前のメーデーにも「労働者が働きもしないで賃上げばかり要求する」と言いました。私もずいぶんと話し合いましたが、父の考えは死ぬまで変わっていませんでした。

船場で勤めた家には、商業学校に通う息子がいました。その息子は洋楽が好きで、舶来のレコードを大切に持っていました。家には「あさがお」のついた手巻き式の大きな蓄音機があつて、お家（いえ）さんたちが浪花節や義太夫を聞いていました。その蓄音機で洋楽をかけると、「ドンドンガヤガ

ヤヒユルヒユルと女の声がやかましい」と苦情がでるので、蓄音機を土蔵に運ぶのが私の役目でした。土蔵では苦情はでないものの、息子が一人では淋しいので、いつも私が相手をさせられました。オペラのアリアなどでしたが「西洋歌舞伎で一時間も二時間もある曲のこれはほんの一部分や」と聞いて、驚いたり感心したりでした。パリ会議や平和博覧会があり「ラメチャンたらぎつちよんちよんで」の歌が流行つた頃です。そして関東大震災に続く大不況です。船場では倒産が相次ぎ、残つたのは警察と税務署だけと言われたくらいでした。ドイツから入っていた染料が入らなくなり、国産を使わざるをえなくなりました。国産のものは触媒の染料やけで布地も痛んだものが多く、月日が経つほど弱ってきます。一、二年もすると布地はさわたただけでポロボロに破れます。その布を「震災を受けた関東なら売れるだろう」と持っていきました。私は被災者のことを考えショックを受けました。また挨拶も「もうかりまっか」で「ぜにぜに」という気風や商売人気が自分にはむかないと見切りをつけました。大阪はごみごみしていて身体もたんの

の所へ来ました。しかし、鋳物の仕事は冬はへばりつきで着物が濡れるし、溶解物を流し込む時は猛烈に熱いので、私はリユーマチを患いリンパ腺が腫れました。二月二十五日手術、一週間で退院しました。耳たぶの後ろにいまでも大きな手術の跡があります。鋳物は無理なので次は木型屋へ行き、鋳物木型職人として一七歳の五月一日に京都の叔母（母の妹）の家に来て、三年で兵隊検査となりました。一九二八年のことです。兵隊検査では色が白すぎてからだが弱いうえに視力不足で第一補充となり戦争へは行かずにすみしました。聯隊区司令官は予備大佐で人間味があり、好感の持てる人でした。「身体は鍛えておけ、ベリリユール島では玉碎いたらしい」等の話をしたことがあります。

京都では叔母に世話になりながら総同盟の京都労働学校へ行きました。また暇なので同志社のYMCAに行きました。プロレタリアセツルメントでそこに中島重先生（注1）がいました。同志社ではSCM（スチューデント・クリスチャン・ムーブメント）キリスト者学生運動）といわれていましたが、田原和郎先生（九九歳で健在、今も交流しています）もいまし

た。世の中は不景気で町工場に仕事がなく失業保険もありませんでした。階下では田原和郎先生たちが消費組合の活動をしていました。一九三一年、満州事変が引き起こされましたが、キリストの道は戦争反対でした。三五年頃、たまたま台風で岩倉の同志社高等学校の柔剣道場が壊れ、復旧工事の中で、それまで同志社の校祖新島襄の肖像額が掲げられていた正面に、神棚を設けろという配属将校の圧力がありました(注2)。

学生は猛反対運動をしました。が、鷲尾健治校長と湯浅八郎総長は軍部の圧力に対して受け入れざるをえなくなり、ついに神棚を設置しました。その後も戦時体制に対するリベラル派の教授と学生の抵抗は激しく行われ、学生はストライキで抵抗しました。京都YMCAも手伝うことになり、私も袴をはいて学生になりすましピラを撒きました。しかし何人かの学生は処分され、退学して田舎に帰り、わたしの工場へも警察が来ました。しかし工場の主人が「うちでは責任もってやっている。うちにいる間は私が責任を持ちます」と庇ってくれて難を免れました。当時学生であつた岡谷元治先生も二度引つ張られ、その後に和田洋一先生も「世界文化」事件で検挙され

ました。

私は日本の中国進出ははじめから間違いだと思っていたし、機械力でもアメリカに劣るので戦争には負けると思っていました。アメリカの機械はピストン一つ見てもテスト機械で各部分の寸法、硬度、重量等一六か所のデータが一度にわかりました。その工作機械を真似て作っていました。日本ではゲージ、キャリパで計っていて、ずいぶん遅れていました。

府の体育課や在郷軍人会の主催で戦時中の点呼や軍事教練などを受けました。思い出深いのは行軍です。平安神宮から樞原神宮まで、また、堅田の還来神社から京都の平安神宮まで八〇キロ歩きました。時々仮泊として二、三時間眠りまた歩くのです。計画をたてる時に京都周辺の地図を一〇枚注文したら西陣の特高から呼び出しを受けました。当時、地図には軍の機密保持のために特別に厳しい目が光っていたのです。分会長の太尉が「自分がいっしょに行つたのに」とあとで私に言いました。「行軍」の業績は主催者がメダルを貰っていい顔ができるのでした。そんなことをしながら一〇年くらいが過ぎて終戦を迎えました。日本全国、焦土となったなか

で京都は焼けず、税金が高くて気の毒といわれました。機械が好き、職人が好き、木型が好きで、一九三五年から五辻製作所を独立させました。

戦後は四七年に民商(当時の納税民主化同盟)活動に参加、その後は安保闘争、府商工団体連合会会長、全国商工団体連合会副会長、常任理事など数多くの団体の役員をしました。六〇年から木型工業同友会会長を一〇年勤めました。が同業組合が倒産したので、清算をしてから辞めました。ほか、関西木型工業会副会長その他多数の役員を歴任し六六年には木型一級技能士検定に合格、七〇年に「木型業界の発展と技術指導などに貢献した」として知事表彰を受けました。七四年には日本共産党の府議会議員に当選し、二期五年努めました。

一〇月七日、聞き取り

中京区五辻宅にて

おわりに

五辻さんの戦後の目ざましい活躍は多くの人に知られていますので省略しますが、ひとつご紹介します。九六年七月七日、盧溝橋事件勃発六五周年の日に京都コンサートホールで催された混声合唱

組曲「悪魔の飽食」の公演に合唱団員として参加されたことです。「悪魔の飽食」は原詩森村誠一、編詩・作曲池辺晋一郎で一時間近い大曲でしたが、忙しい練習にも参加されて、当日は最前列で歌われました。その時の思いは雑誌「ねつとわーく京都」(市職労発行、九六年八月号)に五辻さん自身の手により一文が収録されています。五辻さんの戦前からの活動について伺いました。戦後、五三年たつた今、社会の状況は変わってきましたが、民主主義実現をめざす活動の基本は変わらないのではないのでしょうか。自分の意志で戦時中もその後も社会に対応された五辻さんの生き方に学ぶことはたくさんあると思いました。聞き手の力不足で五辻さんのお話を十分に伝えられないことをお詫びいたします。

注1 中島重一 一八八八年生

れ。「社会的基督教」を説く賀川豊彦の理論的確信と実践的示唆を最も強く受けた。郷里岡山で高校時代に受洗し、東大では政治学の若手教授吉野作造から指導を受けた。卒業後、一九一七年より同志社大学法学部に赴任しSCMを指導した。二九年に同志社を去り、関西学院大学教授とな

る。一九四六年病死。
注2 いわゆる神棚事件。当時の京都日々新聞や大阪毎日・

大阪朝日新聞などが大々的にとりあげ、同志社の苦悩が続いた。

レイテ島の記録抄

——京都一六師団戦記(一)——

伊藤 和市

昭和一九年六月下旬より七月末まで、私はレイテ島タクロバンにある一六師団第四野戦病院に腸チフスに罹り入院していた。二週間に渡り四〇度を越す高熱がつづき軍医、衛生兵たちから絶望視されていた。

この当時腸チフスに罹った患者は誰一人として生命をとりとめた者はいなかった。腸チフスには特效薬とてなく、三度の食事もガーゼで濾した重湯とみそ汁、卵黄一日一個、梅干し少量で、少しでも固形物が入ると腸がビードロのように薄く破れやすくなっているの

腸が破れるおそれがあり、絶対安静、天井を眺めるだけで高熱にもなう頭痛にたえぬいていかなければならなかった。

退院してからドラグ患者療養所の要員となった。

空襲(昭和一九年九月一二日)

レイテ島に大空襲があった。敵機は四機編隊で東南方の海の彼方より、北方のタクロバン方面に向かって何機であるか数えきれないほど次から次へと飛んでいった。ドラグは何も目標がなかったのか、この時は素通りである。私たちは平常通りの勤務をしていた。患者の診療も済み、薬剤室で病床日誌の処方を見ながら調剤をしている最中であつた。パンパンとも

は素通りかと安心していただ敵機がタクロバンの帰途、ドラグを襲撃したのである。

米軍上陸(昭和一九年一〇月一八日)

朝食を済まして病室に出勤診療の準備をしていた時である。

山中寅之助軍曹があわただしく駆けてきて「敵艦隊がレイテ沖へ現われているそうである。直ちにタクロバンの第四野戦病院へ引き揚げるから、引き続き入院加療を要する者はタクロバンへ、退院可能と認められた者は即刻退院を命ずる」と患者たちに申し渡した。一瞬ざわめいたが患者たちは慌だしく身の回りの整理をはじめた。

ダガミよりタクロバン本隊へ

住民たちは、アメリカ艦隊がきているのをまだ知らないのか、平常と変わりなく平静であつた。私たちを乗せた二台のトラックはタクロバンを目指し進んだ。ものの三〇分もたたぬうちに敵機が現われた。必ず四機編隊でタクロバン方面に飛んでゆく。私たちは、機銃掃射されるようなら退避するよう心構えをしていたが、無事タクロバン本隊に到着した。

本隊タクロバン第四野戦病院では元民間の州立病院であるため、緑色の屋根に丸く白抜きで赤十字

が書いてあつた。その赤十字を消すべきか、幹部会議があり残すこととなった。敵は弱体とみなして安心して攻撃してくるか、赤十字条約を尊重して攻撃をしないか。結果論であるが敵は後者を選んだ。そのまま、病院業務を継続していれば大勢の入院患者、衛生部員は生命を落とすことはなかったかもしれない。

鈴木中尉、的場見習士官は隊長昼間少佐より叱責されたらしい。ドラグの住民たちに尊敬され紳士的な、わが部隊随一の手術の名人でもお叱りを受けられたのか。

「ドラグ患者療養所の者は二〇連隊の戦闘救護班としてドラグへ出発すべし」との命令を受け、新たに衛生材料、薬物の追加補給され日没を待つて再びドラグへ引き返すため向かった。

衛生材料も何もないので負傷兵をダガミにある第二野戦病院に入院させることになった。大八車三台用意され、使役兵六名をつけてきた。鈴木中尉はこの時、衛生部員に装具は全部持つてくるよう命じた。大八車に負傷兵を乗せダガミを目指し出発したのである。小林中隊長と鈴木中尉の間でどのような話がされたのかしらないが、使役兵は軽装なのに我々は全装具

を着けている。薬物、衛生材料のない我々はこの速射砲中隊では必要でないのか。もう帰隊しなくてもよいのかもしれない。

正気でないのが不思議なぐらいである。大きな砲撃音で耳が遠くなった感じであるが全員無事であった。今の内に早くダガミの第二野戦病院に行こう。ダガミが安全地帯であり、何処が前線で何処が後方かとの区別もつかない。ただ、薬物、衛生材料のある第二野戦病院へ患者たちを一刻も早く入院させたかった。負傷した時にまず第一にしなければならぬ瓦斯壕、破傷風の予防注射もこの患者たちには、していない状態であった。

キリンの三叉路にさしかかった時、鈴木中尉は「今夜はここで泊まろう」と突然言い出した。まっすぐ(東)行けばタナウアン、右(南)へ回ればタボンタボンである。

三叉路付近に鈴木中尉がいった糧秣倉庫らしき小屋を見つけた。小屋を管理している下士官が兵はいないだろうかと、探したが誰もいない。泥棒のように思えて気が咎めたが、倉庫に入りこんだ。薄暗くて始めは何があるのか、さっぱり分からなかったが、ドンゴロ

スの米袋がたくさん積んであった。六名の一日分くらい持って帰ればよいだろうと天幕を広げ米を入れた。副食にする缶詰はないかと探したが見当たらず戦勝豆と恤兵部の慰問袋がたくさんあった。

翌、昭和一九年一〇月二二日。この時、鈴木中尉が重大な相談を持ちかけた。

「僕はアメリカの俘虜になろうと思っているが、君たちも一緒にいてこないか……僕は英語が話せるから、意思も通じるし、君たちのことも頼んでみるよ。まさか、なぶり殺しにしたりはしないだろう。敵の物量作戦の前ではないくら大和魂があっても駄目だよ。赤ん坊の手をねじるようなものじゃないか。今度の戦争は鉄と人間との戦いのようだ」

しばらく沈黙がつづいた。誰もなんとも返事をしない。鈴木中尉の発言はあまり突然のことでもあり、予期せぬことであつたので即答はできずしばらく考えていた。皆の沈黙を破つて的場見習士官が発言した。

「隊長殿、隊長であるあなたが兵隊たちに……そのようなことを申されるとは何事ですか。我々は日本軍として最後の一兵まで、また我々衛生部員たる者でも、武器

をとって戦わねばならん時じゃないでしょうか」

鈴木中尉がここまで腹を割って兵にまで相談してくれたことは、却って彼を卑怯者と思えなかった。人間味があり一層の親密感を覚えた。私は鈴木中尉的場見習士官もどちらも尊敬していたし、階級を抜きにした人間個人として好きな人々であった。

鈴木中尉は的場見習士官の忠告を受け俘虜になることを思いとどまり、我々の最初に受けた命令と違ったタボンタボンの速射砲中隊へは帰る気持ちはなく、師団軍医部あるいは第四野戦病院の本隊の居所を探し、直接その指揮下に入りたい旨私たちに伝えその情報を聞くべく、再びダガミへ行くこととなった。

ダガミを出発してより一週間くらいあれば山越えでオルモックに行けるだろうと思っていたが、レイテの山は意外に深く一週間過ぎてもオルモックどころか、まだ山中にいた。食糧は尽きてしまい、身体はだんだん衰弱していき、重い装具、銃、鉄帽、背囊、防毒面の重みが肉体に食い込むように感じていた。その上レイテ島は雨期に入ったのか晴れる日は少なく、連日雨が降りそそいだ。土民道も

深い山に入ってしまった現在、無くなってしまい。道なき山を、あるいは谷川を伝ったり、急な山をよじ登ったりしなければならぬのである。その翌日道なき山を降りはじめると突然細い土民道が見つかった。道があると行軍も少しは楽であり早く行動できた。食料がなくなった我が部隊は一日も早くオルモックへでなければ全員餓死してしまうかもしれない。

この時は晴れていた。熱帯地の太陽がカンカン照りつけていたが別に熱いとも感じなかった。土民道を下っていくと今度は幅の広い川に出くわした。川向こうは山また山である。この辺まで来ると砲撃の音も聞こえず、敵機も全く姿を現わさず静かである。広い川のわりに水は浅く深い所でも膝くらいまでしかなく、流れもゆるやかで渡りやすかった。向う岸に到着すると日本兵が四人いるではないか、千秋中尉、出野曹長が彼らの話を聞いているのを総合すると、彼らは一六師団の砲兵であり軍曹一、兵三名である(この軍曹は古川昇氏ではなかっただろうか。古川さんに尋ねたいと思っている)。ハロは敵に占領されていることがわかった。彼らはハロからここに避難してきて軍馬を殺して食べているところであつたらしい。馬の

いる部隊はいいなあ。栄養豊かな馬肉を食べるから、空腹である我が将兵たちは思わずこんなことを口走っていた。

私は責任の重い役目を仰せつかり、部隊の先頭となりダガミに向かって山中を進んでいた。だが心の中は牛が屠殺場へ引かれて行くよう死を予測し足取りも重かった。

午後になって我が部隊の優秀な外科医二人鈴木、大江両中尉が落伍した。この二人の落伍によって我が二半部の将校は千秋中尉、須原中尉、千葉中尉、太田見習士官の四名だけとなってしまった。山中の土民道の片側で相当数のまとまった部隊が休憩していた。その前を通過する時、第四野戦病院の西山上等兵がいるではないか。西山は私の親友である。彼の方が私よりはやく気づき声をかけた。私たちもここで休憩することにして出野曹長と私が彼に会いに行った。

西山から得た状況は、我らの本隊である第一半部はバレンシヤ付近にいたこと、彼は副官である松田大尉が負傷されたのでオルモックまで担送してきたこと、その時すぐ本隊のいる位置に引き返せばよかったのであるが、食糧のあるオルモック付近で栄養補給と休息をとっていたところ、やはり軍参

謀に捕まり、否応なしに戦線離脱兵扱いされ無理やりに各隊混合の決死隊である斬込隊に編入され、ここで休憩している斬込隊の将兵であること。

西山上等兵を我が部隊へ返してもらえないかと斬込隊の上級将校に千葉中尉が交渉しにいった。交渉の成功を願ったが無駄であった。一生得難い良き戦友とこの山中で偶然に会い、別れて行かねばならない非情な運命であった。彼も斬込隊なら、私のほうも死地に向かうようなもの、だが私たちの方がある程度死への距離は遠かった。彼は貴重品のごとく大切であるはずの斬込隊にのみ支給された戦勝豆を私にくれた。彼の両手をしっかりと握りしめ無言のまま別れを惜しんでいる時、彼の顔も私の顔も頬に涙がつつた。

彼は、我々が出発して行く姿を棒立ちになったまま見えなくなるまで見送っていた。

白骨街道

私たちが最初ダガミからオルモックへと来た道は一六師団将兵の退避路のごとくになっていて、こちらに向かってくる者はあってもダガミの方へ向かう者は私たちの部隊以外には全くない。すれちがう兵たちは、オルモックは近い

か、オルモックに行けば食糧はあるかと、決まったように尋ねて行った。そして山道にはまるで道標のごとくいたる所に友軍の死骸が横たわっていた。熱帯の太陽熱のため早くも白骨化したもの、腐りかけの死臭というか悪臭のプンプンする死体、黒いしけ虫のような、うじが目や鼻、口と黒々と群がり出入りして全く正視できず、顔を背けたくなるような、むごたらしい死体がごろごろしていた。谷川を通過する時必ずといっていいほど、水のなかに顔を上半身突っ込んだまま息絶えている死体を見かけた。

毎日毎日数えきれないほど多くの死骸を見ていると私たちも、あなりたたくない、こんな山中で犬死のような死に方をしたくないと思うだけで、死骸に対して何とも感じなくなっていた。路傍には乞食のようになつて何か食べるものを恵んでくださいと哀れな声を出して物乞いをしている兵がいたる所にいた。中には一〇円札をひらめかせ、これで何か食べるものを売ってくださいと哀願している兵もあった。こんな地獄の道を私たちは再度ダガミへと進んで行ったのである。

隊長戦死

朝、どんよりと曇った薄暗い感じの森の中を歩いていると、柔らかい布が顔に触れて気味の悪い思いをし、通り過ぎて振り返り上を見上げると逆さ釣りにされたままの日本兵の死体である。

既に白骨となり巻脚はんが解けてぶら下がりその端が私の顔をなげたのだ。これは、殺気だっている最前線にいる米兵がしたのか、比島ゲリラ兵がしたのか、あるいは、日本軍の手で見せしめのためしたのか、惨たらしい殺され方をした同胞の死骸を目撃した私は、背筋が凍る思いをした。

もう私たちの部隊は節約していた食糧もなくなっていた。この山中で野垂れ死にしよう運命なのか、そんな姿にはどうあつてもなりたくない。生命のある限り生き抜きたいと自分で自分に言い聞かせていた。この森をすぎると前方、右方、左方と三方の山に囲まれた台地に出た。大木がたくさん切り倒され土民の開墾地らしい。芋畑でもありそうな感じだが、どうも危険な地形である。この日の先頭は隊長の千秋中尉、私は二番目である。気味の悪いほどあたりは静寂で台地の真ん中にある曲がりくねった道を進んで行った。

先頭が台地の中心くらいまで来

たところ、ちようど部隊全員が台地にすつぽり入りこんだ時である。ジャップ、ジャップという声とともに自動小銃、機関銃で前方の山からバリバリ攻撃してきた。私は、大木の切り株の側へ駆け寄り、伏せた。振り返って見ると全員伏せているようである。そこへ雨が降ってきたが一向に射撃を止めない。我々は身動き一つできずに全身濡れながら長い時間伏せたきりである。この切り株のおかげで私のいる位置は敵弾から死角になっっているようだ。もし右か左手の山から撃たれたならば部隊は全滅するかもしれない。だが、敵はどうしたものか、雨が降っているためか、右や左の山に移動せず前方の山からのみ撃ちまくっているのだ。尿意をもよおしたのでうつ伏せに寝てズボンを履いたまま用をたした。

我が二半部はこの開墾地で相当な犠牲をはらい、集合したものは、二十数名である。千秋隊長も戦死され新たに須原中尉が隊長となり、残る将校は千葉中尉、太田見習士官だけとなった。須原中尉が私に、千秋中尉の図囊を取ってくるように命じられ、その中に磁石と地図が入っているのだ。須原中尉の当番兵をしている野呂をつれて台地へ行った。千秋中尉の戦

死体は私の伏せていた位置より五mくらい前であつたので暗がりの中でもすぐ発見できた。

我々は、台地を進むことを止め、逆さ釣りの死骸のところまでは戻らず南側の山の中へ入って夜を明かすことにした。

編集後記

編集子の手もとに一九二八、三二年の序文がついた旧陸軍大学校編『統帥綱領 総帥参考』という図書(財団法人偕行社 一九六二年刊行)があります。戦前・戦時には厳重な「軍事機密」のあつかいを受けていました。高級指揮官(方面軍司令官・軍司令官)のための戦争教科書ともいべき内容です。師団長以下は対象として予定されていません。そこでは「兵站の適否は直に軍の作戦を左右す」とし、策源と戦地とを連絡する兵站線の設定のために万難を排する必要を説き、その兵站線として鉄道、陸路、水路をあげ、さらに兵站の主務は補給にあると強調していました。現代なら空路が加えられるところでしょう。また重要な鉄道及び船舶等の運用は「通常最高統帥これを総轄」するものとしています。ところで海軍軍令部参謀をへて海上護衛総司令部参謀をつとめた、旧海軍大佐の大井篤という人物が『海

上護衛戦』(朝日ソノラマ 一九八三年刊)という書物を書いています。太平洋戦争で日本海軍は主力艦の艦隊決戦にばかり力をそそぎ、南方へ展開した日本軍に補給するための輸送船団への護衛をおろそかにしたため、アメリカ軍の潜水艦によってほとんど撃沈されてしまいました。補給を断たれて太平洋上の散在する島にとり残された日本軍は、飢えたまま軍事的意義をうしないままです。こうしてアメリカ軍はサイパン・フィリピン・沖縄を占領し、つづいて直接に日本本土の占領をくだるようになったというのです。この書物は近代戦における兵站・補給とそれを守るための海上護衛の重要性を主張したものといえるのです。いま国会では日米ガイドラインの改訂にもづく有政法制が議論の焦点となっています。その重点は日本の自衛隊が米軍の後方支援をするところが、憲法の禁じた戦争行為か否かという問題であるといつていいでしょう。『統帥綱領 統帥参考』と『海上護衛戦』を読んだ編集子には、政府のいう後方支援とは、主として作戦地に展開する米軍の「なぐりこみ部隊」の兵站・補給線を「海上護衛」することを意味しているのしか思えません。もちろん航空機による対潜警戒も含まれます。しかも「海上護衛」だけでなく、陸上の道路・病

院・工場・港湾の使用や自治体の協力を強制するというのですから、軍事用語でいう戦時動員をも兼ねた広範な「後方支援」といふべきでしょう。これが国際法のいう戦争行為であることはあまりにも明白です。「後方支援」すれば、米軍の敵対する国家から日本が武力攻撃を受けることを覚悟せねばなりません。

この号から伊藤和氏氏の諒解を得て同氏著の『レイテ島における記録と戦争たち』(非売品 一九九七)の抄録を連載することにしました。まさに補給を断たれた外征軍、しかも京都を原隊とした第一六師団のさんたんたる戦記です。このような状態に追いやられた軍勢力は、他の方法で必死の反撃を試みるでしょう。日本軍はこうして特攻攻撃にのめり込みました。「後方支援」する日本の自衛隊も何らかの報復を受けることは必至といふべきです。この連載が問題を根本から考え直してみるきっかけとなることを心から念願する次第です。(山井)

会および会報については、左記へご連絡ください。

〔事務局〕

〒六〇五—〇九五三

京都市東山区今熊野

南日吉町三九 奥村和郎

TEL FAX 〇七五—五六一—七四八五